

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：30107

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01656

研究課題名（和文）乳幼児養育者の疲弊を緩和するWebツールについての基礎・応用的研究とその社会実装

研究課題名（英文）Basic and applied research on web tools to alleviate the fatigue of infants and their social implementation

研究代表者

古谷 嘉一郎（Furutani, Kaichiro）

北海学園大学・経営学部・准教授

研究者番号：80461309

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,100,000円

研究成果の概要（和文）：大別して、1. 子育てバーンアウトにかかわる実証研究、2. 子育てバーンアウト緩和のためのアプリ開発を実施した。

前者については、子育てバーンアウト尺度日本語版を作成し、Web調査等を通し、子育てバーンアウトと個人要因（子育ての完全主義、パーソナリティ）や環境要因（養育している子どもの数、家庭の混乱状況）の関連を探った。

後者については、調査で得た自由記述、文献調査をもとに、養育者に役立つセルフチェック機能（子育て完全主義、子育てバーンアウト、睡眠状況）を測定し、視覚的に確認できる機能や子育てに役立つ情報を掲載したWebアプリを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子育てバーンアウト尺度の日本語版作成により、日本における子育ての燃えつきについて詳細な測定が可能になった。特に、単なる子育てにおける疲弊感のみならず、養育対象との距離感などを測定できることは有益であると考えられる。また、世界比較調査において、個人主義的な国に住む人のほうがバーンアウトしていることも明らかになった。加えて、子育てバーンアウトと子育ての完全主義の関連性の検討の結果、子育てでミスをしてはいけないという考えがバーンアウトの予測要因として強いことが明らかになった。そのため、今後寛容性と柔軟性を持つ子育て環境の構築が必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：We conducted 1. empirical research on parental burnout and 2. development of an application to alleviate parenting burnout. For the former, we created a Japanese version of the Parental Burnout Assessment (PBA-J) and explored the relationship between parental burnout and individual factors (parenting perfectionism and personality) and environmental factors (number of children in care and family chaos) through a web survey.

For the latter, based on the free descriptions obtained in the survey and the literature review, we measured self-check functions useful for caregivers (parenting perfectionism, parental burnout, and sleep status) and created a web application with functions for visual confirmation and useful information on parenting.

研究分野：子ども学、社会心理学

キーワード：子育てバーンアウト 完全主義

1. 研究開始当初の背景

乳幼児養育者(以下、養育者)の心理的燃えつき(以下、バーンアウト)は、養育者自身の不適応だけでなく、養育している子どもにも悪影響をもたらす(e.g., Wenzel et al., 2015)。この問題に目を背けることは、日本の未来の衰退に他ならず、早期に介入すべき大きな社会問題である。本研究では、心理学の知見をもとに、「完全主義の強い親がどういった思考の偏りを介してバーンアウトし、養育者や子どもにどのような影響があるのかを解明し、その影響を改善すること」を目的とし、「親のバーンアウト予防を目的とした Web ツールを作成し、その有用性を確認する」ことを計画した。養育者のバーンアウトの解決については、様々な本、テキストが出版されている。しかし、時間的にも物理的にも、養育者がこれらの本を読むことは容易ではない。そのため、短い時間かつ、手軽に養育者が閲覧できる情報通信機器(スマートフォン、PC)を活用し、養育者に思考の偏りを理解してもらったり、エクササイズを介して思考の偏りを少しでも改善してもらい、疲弊を少しでも和らげてもらいたいと考えている。

2. 研究の目的

研究当初の目的は大別して2つであった。1つ目は、「子育てバーンアウトに影響する要因の検討」であった。2つ目は、1つ目の知見をもとに「親のバーンアウト予防を目的とした Web ツールを作成し、その有用性を確認する」ことであった。

さらに、研究の進展に伴い、国外の研究者との連携を強め、「子育てバーンアウトの国別比較」の実施も目的となった。

3. 研究の方法

基本的には Web 調査による調査手法が主となった。その理由は以下の2点である。第1に PBA を用いた精神生理学的実験による検討は、研究分担者の死去により達成が困難となってしまった。本実験を担当する予定であった分担者は、養育者とその子どもの生理指標を実験室内で同時に測定できる高い能力とフィールドを持っていた。当該事象が起こったのち、申請者らはこういった高い能力を持ち、本研究の遂行に協力してもらえぬ研究者を探したものの、見出すことができなかった。第2に、2019年末から起こったコロナ渦の影響により、実験や対面インタビュー調査等の実施が困難となってしまったためである。しかしながら、このコロナ渦によるストレスフルな状況下における子育て養育者調査を実施し、コロナ渦の影響を検討した。

4. 研究成果

研究成果は大別して5つに分けることができる。以降ではそれらの研究について概略を示す。

1. 日本語版子育てバーンアウト尺度 PBA-J の信頼性、妥当性の検討ならびに諸変数との関係 (Furutani et al., 2020)

子育てバーンアウト尺度 (Parental Burnout Assessment : PBA) (Roskam et al., 2018) の日本語訳 (PBA-J) を行い、その妥当性と信頼性を検証した。その際に、先行研究 (Roskam et al., 2018) に基づき、いくつかの変数との関係も確認した。

先行研究と同様、日本語版の子育てバーンアウト尺度は4因子に分類することが妥当と判断した。具体的な因子名は、EX: 情緒的消耗感 (例 親としての自分の役割にすっかり疲れ果てている、自分の子供の世話をするエネルギーが全くない)、CO: 過去との比較 (例 以前のような良い父親または母親ではなくなっていると思う、父親または母親としての、自分の方向性を見失っているように感じる)、FU: (親であること)のあきらめ (例 父親または母親としての自分の役割には、もう耐えられない、もうこれ以上、親であることに耐えられない)、ED: (子どもとの)感情的距離 (例 親として子供にしなければいけないことはしているが、それ以上のことはしない、毎日の決まった仕事(車で送る、寝かしつけ、食事)以外に、もはや子供のために努力することができない)であった。

なお、父母間での因子構造を確認するため、多母集団同時分析を実施した。その結果、CFI、RMSEA 等の適合度指標は良好であった。また、強測定不変であっても適合度としては許容可能であった。ただし、配置不変-弱測定不変間の χ^2_{diff} が有意であるため、本サンプルでは配置不変が最も妥当と判断した。

また、デモグラフィック変数との関係性を検討した。検証に利用した変数は性別、家族の種類労働形態、特別なケアを必要とする子どもを育てているか否か、回答時における5歳未満の子どもの養育有無であった。(男性よりも)女性、一人で子供を育てている、特別なケアを必要とする子どもを育てている、5歳未満の子供を育てているといった場合、子育てバーンアウト得点が高かった。

さらに、併存的妥当性についても確認を行った。まず、PBA 以前に Roskam が開発した PBI (Parental Burnout Inventory) の日本語版である PBI-J との関係は比較的高い (LPA とは関連無し) ことが明らかになった。これは、PBA が子育てバーンアウトを測定していることの中

能性を示すものであった。PBA-J と職業バーンアウト尺度である JBI との間には弱・中程度の相関が認められた。バーンアウトという概念ではあるが、子育てと仕事という文脈の違いが示されている可能性を示すものである。さらに、抑うつ傾向と中程度の相関も見つめられた。バーンアウトがうつと関連しているという一連の先行研究の結果を示している。

2, 子育てバーンアウトについての国際研究

2018 年から、子育てバーンアウトにかかわる研究コンソーシアムである International Investigation of Parental Burnout (IIPB)が発足した。当該コンソーシアムメンバーとともに各国の子育てバーンアウトと子育てにかかわるデータを取得した。申請者らは日本におけるデータ取得の責任者であった。本国際研究の結果の概要を以下に示す。

(1) 個人主義に着目した子育てバーンアウトの国際比較調査 (42 各国) (Roskam et al., 2021)

子育て領域における高レベルのストレスは、親と子どもの双方に深刻な影響を与える状態である子育てバーンアウトを引き起こす可能性がある。しかし、子育てバーンアウトが文化によって異なるかどうかは明確ではなかった。また、仮に異なる場合、その理由もまた明らかでなかった。そこで、42 各国 (17,409 人の親、71%が母親、平均年齢 39.20 歳) の子育てバーンアウト有病率を調査した。その結果、有病率は国によって大きく異なることが明らかになった。文化的価値観に注目すると、個人主義的な文化圏 (国) では、子育てバーンアウトの有病率ならびに平均レベルが顕著に高いことが明らかになった。加えて、国ごとの経済的不平等や、子どもの数や年齢、子どもと過ごす時間など、これまでに調査された他の個人や家族の特性よりも、個人主義が子育てバーンアウトに強く影響することが明らかになった。これらの結果は、欧米の文化的価値観が、親をより高いレベルのストレス下に置く可能性を示唆しているといえる。

個人主義傾向の高い欧米諸国においてバーンアウト傾向が高い理由として、パフォーマンスと完璧主義の文化が個人主義の国々で培われていることが考えられる。例えばアフリカ諸国などでは、子どもの数が多いものの、村全体での子育てを実施する。つまり、集団主義的な側面が強くなるといえる。一方で、個人主義の国々では子育てが孤独な活動、例えば、片方の養育者のみが行うといったことが考えられる。さらに、新型コロナウイルス感染拡大によって、対人接触がさらに少なくなり、家族が孤立し、家族以外の社会的なつながりから切り離されているという状況にあった。

子育てのストレスにさらされ、その結果として子育てバーンアウトが起こることを防ぐためには、複数の観点があろう。例えば、地域社会の中で親同士が分かち合い、相互扶助という側面を文化の中に復活させることである。また、完全な親という崇拝を捨て、世の中にあるすべての子育てのアドバイスの見解をある程度確認した上で、自分に合ったものを選ぶなどの方略も考えられる。

(2) 性役割に関する価値観と子育てバーンアウトの関連に関する国際比較調査 (40 各国) (Roskam et al., 2022)

この数十年の間に、欧米諸国では男女平等ヘシフトが起きている。そして、雇用や教育分野では男女不平等が過去とくらべて大幅に解消された。不平等は苦痛につながるため、この不平等の解消は主に女性に恩恵をもたらしてきた。しかし、子育ての領域は例外である。男女平等主義の国でさえも不平等が残っている。本研究では、平等主義的な価値観を持ち、子育て領域以外の領域で男女平等が高いという特徴を持つ国で子育てをしているとき、子育てにおける不平等を経験すると、子育てという特定の領域における母親の心理的苦痛が増すという仮説を立てた。40 各国の 11,538 人の母親を対象としたマルチレベル・モデリング分析により、この仮説が確認された。個人レベルに注目すると、高い平等主義的価値観を持つ母親ほど子育てバーンアウト傾向が高かった。また、国レベルに着目すると、高い男女平等的な価値観が社会的に共有されている国ほど高いバーンアウト水準も高かった。この関連性は、個人レベルのデモグラフィックな特性や社会レベルの経済的格差をコントロールしても影響していた。これらの結果は、平等主義的価値観や男女平等の重要性と、子育てのような特定の分野で不平等が依然として存在する場合のその逆説的効果を示している。つまり、子育て以外の内在化された価値観・社会制度は男女平等である一方で、子育てについての内在化された価値観・社会制度は男女不平等であるという不一致がこの子育てバーンアウトを引き起こす要因となっている。この結果はマイクロレベル (性役割の価値観) だけでなくマクロレベル (社会制度) についても注目すべきであるということを描いている。

(3) COVID-19 感染拡大状況下における子育てバーンアウトに関する国際調査 (27 各国) (van Bakel et al., 2022)

COVID-19 のパンデミックは、世界中のあらゆる社会に種々の影響を与えていた。そのため、COVID-19 は多くの家庭で子育てにも影響を及ぼすと予想された。子育て領域における高いス

トレスは、養育者の健康や福祉に深刻な影響を及ぼす状態につながるということが知られている。そこで、26カ国（親 9,923 人、母親 75%、平均年齢 40 歳）における親のバーンアウトの有病率が、パンデミックの数年前と比較して COVID-19 中に増加したかどうかを検討した。その結果、ほとんどの国で、パンデミック期間中に子育てバーンアウトの有病率が有意に増加したことが示された。さらに、政府による対策（例：外出禁止日数、ホームスクール）や個人・家族レベルの要因（例：性別、子どもの数）に加えて、甘えの少ない国の親ほど、子育てバーンアウトに苦しむことが明らかになった。この結果は、一般的に、また特にパンデミック時に、親の役割や義務に関する規範がより厳しくなったことが、子育てバーンアウトのレベルを高めた可能性を示唆している。

さらにここでは、Hofstede (2001)の 6 次元モデルに着目した。当該モデルは、文化的差異を「権力格差：大／小」、「集団主義／個人主義」、「女性性／男性性」、「不確実性：回避／許容」、「短期志向／長期志向」、「人生の楽しみ方：抑制的／開放的」についてとらえている。本研究の結果では、人生の楽しみ方が子育てバーンアウトに影響していることが明らかになった。つまり、開放的な国々の人々ほど、子育てバーンアウトが低かった。しかし、本研究は同様の観点で検討した Roskam(2021)の結果と異なっていた。これは、通常の状態と COVID-19 の感染拡大状況という状況の差異が考えられる。COVID-19 の感染拡大状況は養育者に極度のストレスがかかる状況といえる。その際、抑制的（厳しい社会規範によって欲求の充足を抑え、制限すべきだという考え方が蔓延する）社会よりも、開放的（社会は、人生を味わい楽しむことに関わる人間の基本的かつ自然な欲求を比較的自由に満たそうとする）社会のほうが、COVID-19 の感染拡大下での子育てのストレスを緩和させている可能性がある。

2. 子育てバーンアウト予防のための Web アプリ KMPs(こども・ママ・パパサプリメント)開発 <<https://ik1-114-63724.vs.sakura.ne.jp/>>

ここまでの知見から、子育てバーンアウト低減に対して社会制度に介入することはかなり困難である。また、養育者をとりまく個々の対人関係に対してアプローチすることも現実的ではない。そこで本研究では養育者の認知や考え方にアプローチすることが望ましいと考えた。そこで、養育者の認知や考え方にアプローチできるアプリ開発を試みた。その際、スマートフォンのアプリを iOS、Android それぞれ開発することはリーズナブルではないと判断した。そこで、Web アプリとして、ブラウザ上で活用できることを目標とした。

本アプリの特徴は、以下の 6 点である。(1)運営者がアプリの内容を随時追加・更新することが可能であること(2)セルフチェック機能として、子育てバーンアウト、子育てについての完全主義、不眠傾向を測定できること、(3)子育て経験者が示す情報提供、(4)科学的エビデンスに基づいた心理的知見の提供、(5)運営者の研究遂行のためのデータ取得機能、(6)行政情報の提供機能。

第 1 の追加・更新可能性である。当該アプリは簡易エディタ機能を備えている。そのため、必要に応じて、迅速に新たな情報を運営者が追加したり更新したりできるようになっている。たとえば、急激な新型コロナウイルスの感染拡大が起こった場合、それに対応するための情報を提供できる。第 2 のセルフチェック機能は、現在の適応状況（例 現在どのくらいのバーンアウト状態なのか）を確認できるものである。簡易なアセスメントを行うことで、養育者自身が置かれている精神的健康を子育てバーンアウトの観点から確認できる。加えて、子育てのみならず、生活の多様な面に影響を与える睡眠、子育てバーンアウトに対して関連が強い個人傾向である完全主義を網羅することで、養育者個々人のセルフケアに役立つと考える。第 3 の情報提供機能は、相互サポートの観点に基づいている。過去に子育てを経験したからこそ提供できる情報の内容は、現状、子育てに苦慮しているもしくは、自分の子育てが正しいかどうか不安である養育者の福音となりえる。もちろん、おかれた子育て状況は異なるため、すべての情報がすべての養育者に有益ではない。しかし、多様な情報を提供することにより、養育者にとってほしい情報が手に入る可能性を高めている。第 4 の科学的エビデンスは、これまでの子育て研究に基づいた多様な情報を提供することで、養育者に有益な情報を提供する可能性を高めるものである。こちらも第 3 の機能と同様、すべての情報がすべての養育者にあてはまるものではない。しかしながら、たった一つの情報であっても、養育者のストレスフルな状況が少しでも緩和できるのであれば、それは望ましい結果であるといえる。最後に第 5 のデータ取得機能である。メールアドレスとパスワードを登録することで当該アプリの閲覧が可能になる。可能な限り個人情報研究者側が取得しないようにするための方策として今回採用した。メールアドレスと紐づけすることで、閲覧時間、閲覧回数、子育てバーンアウト・完全主義・不眠傾向についてデータ取得が可能である。また、ログインしたのち、1 週間ログインしないと、リマインドメールが送信されるようになっている。なお、今後は LINE などのプライベート志向が強い SNS アカウントとの連携により、プッシュ通知を可能にすることが望ましいだろう。そして、6 番目の行政の情報提供である。セルフケアでは解決できないことも考慮し、行政に対してアプローチできる連絡先も示した。もちろん

ん、示すだけでは十分な効果があるとは言えない。しかし少なくとも、利用者の中で1人でも当該機能を活用できれば望ましいと考えたため、当該機能を導入した。

子育てで燃えつきてしまう人を0にすることは困難である。しかし、燃えつきようとしている人を少しでも減らすことが課題であるため、当該アプリはその一助になると考えている。

4. 子育てバーンアウトにかかわる応用的、実践的検討

3までは、本課題の主たる検討であった。しかしながら、本課題遂行時において、応用的、実践的検討が行われた。ここではそれらの検討のうち、2つを記す。

(1)新型コロナウイルス感染拡大状況下における親子広場の運営

研究分担者の森野が所属する長崎大学では、幼児対象の子育て広場を対面で実施している。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大状況下においては、それが困難となっていた。しかしながら、少しでも可能な限り対面で実施しようということを意識し、マスク着用、ソーシャルディスタンスの徹底、換気の徹底などにより、子育て広場を実施した。5名の参加者であり、子育てバーンアウトの傾向は病的でなかったものの、1名は情緒的消耗感がやや高めであったり、子どもに対してやや距離を置いている（おかしさを得ない）可能性が示されていた。また、サポートも必要と感じている程度も月に数回と答えていることから、ニーズを把握し、早期介入をしたほうが良いかもしれないことも分かった。さらに、子育て広場でのコミュニケーションから、新型コロナウイルスへの怖さを感じていることもあるために、支援センターにいけないのはつらいことが示唆された。また、別の人は、親役割でかなり消耗しているといったことも示唆された。研究者との面接やコミュニケーションと子育てバーンアウト尺度を組み合わせることで、量的かつ質的に養育者のメンタルヘルスを詳細に把握可能であるといえる。

なお、子育て広場にて得られたコメントを抜粋して、以下に示す。「同年代の子供と接する機会が少ない中、親子広場で少しでも他のお子さんと交流することができてうれしいです」、「コロナがあるので、支援センターに行くことや子供が集まる場に行くことに漠然とした不安がある」、「もっと子供達と遊んであげたい、でももっと家事もしたい、思い描いていたような母親ではないという葛藤がある」、「コロナ禍で人との関わり方も変わってしまいましたが、主人の在宅勤務のおかげで前よりも家事、育児のサポートをしてもらえるようになり、気持ちにゆとりが持てるようになりました」、「主人が出張が多く、またコロナ禍で児童館なども自粛していて、普段娘が私としか接しない状況なので、親子広場で学生のみなさんや先生と遊んでいただいて刺激をいただけることが本当にありがたい」。なお、本子育て広場の概要、別視点からの検討については森野他(2021)に掲載されている。

(2)子育てバーンアウト尺度短縮版の検討

子育てバーンアウト尺度は23項目であり、比較的回答しやすい。しかしながら、経験サンプリングによる調査、大規模調査による検討を実施する場合、やはり項目数が多い。これを鑑み、短縮版であるThe Brief Parental Burnout Scale (BPBs) (Aunola et al., 2021)が開発された。本尺度はPBAの項目から5項目を選んだものである。なお、そのうちの1項目については、Aunola et al (2021)の研究結果から、追加説明を挿入したほうが望ましいことが指摘されている。「自分の子供の世話を、まるで自動操縦装置のようにやっていると感じる(親として子供にしなければいけないことはしているが、それ以上のことはしない)」（カッコ内が追加説明）。この点を考慮し、以下の5項目が現状において最適と判断されている（Table 1）。

Table 1
BPBS-J 項目案

EX3. 親としての自分の役割に疲れてしまっているので、寝ても疲れが取れないように思える
EX2. 親として本当に疲れ果ててしまっている感覚がある
EX8. +ED1. 自分の子供の世話を、まるで自動操縦装置のようにやっていると感じる(親として子供にしなければいけないことはしているが、それ以上のことはしない)
ED3. 自分の子供に対して、もはや愛情を示すことができない
FU3. もう、親などやっていられないと感じる

注：EX、ED、FUはそれぞれ情緒的消耗感、FU:（親であることの）あきらめ、ED:（子どもとの）感情的距離を示す。また、アルファベット後の番号はRoskam (2020)の項目番号と対応している。

現在、当該項目を活用した調査を実施し、項目応答理論、潜在ランクモデルといったテスト測定に関連する分析を活用した分析によって、日本語版BPBsを開発する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Roskam Isabelle, Galle Laura・・Kaichiro Furutani・・・Moira Mikolajczak	4. 巻 53
2. 論文標題 Gender Equality and Maternal Burnout: A 40-Country Study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Cross-Cultural Psychology	6. 最初と最後の頁 157 ~ 178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/00220221211072813	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 木戸 久美子、植村 裕子、古谷 嘉一郎	4. 巻 76
2. 論文標題 特別記事 Parental Burnout(子育てバーンアウト)に関する文献レビュー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 助産雑誌	6. 最初と最後の頁 170 ~ 179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11477/mf.1665201990	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森野美央, 倉田 伸, 前田桂子, 古谷嘉一郎	4. 巻 20
2. 論文標題 コロナ禍の親子広場における子育て・子育て支援の現状と課題: オンライン保育での手遊びと、領域「表現」・「言葉」で示されている価値との関連を手がかりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 長崎大学教育学部教育実践研究紀要,	6. 最初と最後の頁 125 ~ 135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 加藤孝士・太田光洋・渡邊望・中山智哉	4. 巻 13
2. 論文標題 コロナ禍が保育に与えた影響に関する予備的調査 保育者の意識の変化や保育の工夫に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保育文化研究	6. 最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤孝士・太田光洋・原野明子・姫田知子・中山智哉・渡邊望	4. 巻 4
2. 論文標題 コロナ禍における園長の保育への取り組みと意識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 こども学研究	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤孝士	4. 巻 60
2. 論文標題 放射能災害下の保育を経験した保育者の意識－保育者としてのやりがい困難に注目した量的・質的視点からのアプローチ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Roskam Isabelle, ...Furutani Kaichiro, ...Kawamoto Taishi, ...Mikolajczak Moira	4. 巻 2
2. 論文標題 Parental Burnout Around the Globe: a 42-Country Study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Affective Science	6. 最初と最後の頁 58～79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s42761-020-00028-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Furutani Kaichiro, Kawamoto Taishi, Alimardani Maryam, Nakashima Ken'ichiro	4. 巻 2020
2. 論文標題 Exhausted parents in Japan: Preliminary validation of the Japanese version of the Parental Burnout Assessment	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 New Directions for Child and Adolescent Development	6. 最初と最後の頁 33～49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/cad.20371	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 中村菜々子, 古谷嘉一郎, 松永美希	4. 巻 64
2. 論文標題 子育てに関する親の困り感に関する予備的検討 自由記述の質的分類	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育学論集	6. 最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 古谷嘉一郎
2. 発表標題 関係流動性, 完全主義と子育てバーンアウトの関連
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第67回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古谷嘉一郎、中村菜々子、松永美希
2. 発表標題 感情制御と子育てバーンアウトの関連－松永美希2020年5月時点におけるCovid-19感染拡大状況下での調査結果より－
3. 学会等名 日本健康心理学会第34回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森野美央, 室野亜津子, 稲吉幸恵, 清水洋子, 小林真実, 森奈津子, 森田 遥
2. 発表標題 遊び中心園における好奇心の育ちと幼小接続 : 年少時から小学校1年時までの追跡調査
3. 学会等名 教育実践研究フォーラムin長崎大学
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤孝士・中山智哉・太田光洋
2. 発表標題 コロナ禍が保育に与えた影響 保育者の意識の変化や保育の工夫に着目して
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古谷嘉一郎、マリアム アリマルダニ、中島健一郎
2. 発表標題 子育てバーンアウトとデモグラフィック変数の関連 日本人データをもとにした検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古谷嘉一郎、マリアム アリマルダニ、中島健一郎
2. 発表標題 Parental Burnout Assessment日本語版の信頼性と妥当性の検証
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古谷 嘉一郎
2. 発表標題 完全主義懸念と努力が精神的健康にあたえる影響 サポートを媒介要因として
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miwo MORINO
2. 発表標題 Teachers' Support to the Development of Emotion Regulation: To Enable Smooth Transition from Kindergarten to Elementary School Education
3. 学会等名 20th Annual Conference of PECERA (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 古谷 嘉一郎、村山 綾	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 やってみよう！ 実証研究入門	

1. 著者名 フィリップ・コー、中村 菜々子、古谷 嘉一郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 368
3. 書名 パーソナリティと個人差の心理学・再入門	

1. 著者名 谷口 淳一 (著), 西村 太志 (著), 相馬 敏彦 (著), 金政 祐司 (著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 201
3. 書名 エピソードでわかる社会心理学: 恋愛関係・友人・家族関係から学ぶ	

1. 著者名 森野美央	4. 発行年 2020年
2. 出版社 全国社会福祉協議会	5. 総ページ数 255
3. 書名 最新 保育士養成講座 第6巻 子どもの発達理解と援助	

1. 著者名 日本応用心理学会、応用心理学ハンドブック編集委員会、藤田 圭一、古屋 健、角山 剛、谷口 泰 富、深澤 伸幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 858
3. 書名 応用心理学ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Burnout Parental https://en.burnoutparental.com/ 40カ国国際調査の論文が掲載 https://www.hgu.jp/info/news/20220412-01.html 視線によるコミュニケーションボード (eTalk) https://maruhi.heteml.net/programs/etalk/etalk.html Burnout parental https://en.burnoutparental.com/ 経営学部古谷嘉一郎准教授の「子育てバーンアウト尺度」を翻訳した論文が掲載 https://www.hgu.jp/info/news/20201020-01.html 経営学部古谷嘉一郎准教授が参加した国際調査の論文がAffective Science誌に掲載 https://www.hgu.jp/info/news/20210401-02.html 経営学部古谷嘉一郎准教授監訳、田中勝則准教授訳の書籍出版 https://www.hgu.jp/info/news/20210420-01.html 子育てバーンアウトと社会心理学 https://rc-hgu.jp/furutani/ Parental Burnout https://en.burnoutparental.com/</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	吉田 弘司 (Yoshida Hiroshi) (00243527)	比治山大学・現代文化学部・教授 (35410)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森野 美央 (Morino Miwo) (00413659)	長崎大学・教育学部・准教授 (17301)	
研究分担者	加藤 孝士 (Kato Takashi) (10631723)	長野県立大学・健康発達学部・准教授 (23603)	
研究分担者	濱田 祥子 (Hamada Syoko) (20638358)	比治山大学・現代文化学部・講師 (35410)	
研究分担者	中村 菜々子 (Nakamura Nanako) (80350437)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	胡 泰志 (Ebisu Yasushi) (90284132)	比治山大学・現代文化学部・准教授 (35410)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	蔵永 瞳 (Kuranaga Hitomi) (30634589)	滋賀大学・教育学部・准教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

ベルギー	UCLouvain			
オランダ	Tilburg University			他37機関